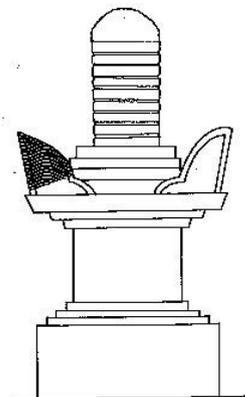


駒ヶ根市文化財

| | |
|-----|---|
| 名称 | 応永の宝篋印塔 |
| 種別 | 歴史資料 |
| 所在地 | 東伊那大久保 |
| 説明 | <p>大久保の蓮台場(れんだいば)、墓地内の一画に土台石を固定し、その上に 6 基の塔(残欠部も含む)が保存されている。この内、右側の 1 基を除く 5 基が宝篋印塔(ほうきょういんとう)あるいは宝篋印塔の残欠である。この辺一帯に散在していたものを大正年間にまとめたものであるという。石質は安山岩で完形品は左端の 1 基だけである。</p> <p>宝篋印塔には、基礎が 2 段になっている関東形式と、1 段からなる関西形式があるとされているが、今見るこの形では関西形式と考えられる。基礎の部分に陰刻の文字があるものが 3 基あり、一番左のものから見てゆくと、「道昌禅門 同登彼岸 応永廿二年八月十九日」「宗伝禅門 応永廿一年五月廿九日」「浄回寿位 同登彼岸 応永十三年二月十四日」と判読できる。3 基とも応永年間(1394～1428)つまり南北両朝の統一がようやく成った直後、室町時代初期のものだと判断できる。刻銘の不明な他の 2 基も、多分同時代のものと推定して良いであろう。</p> <p>道昌、宗伝、浄因(回は因の俗字)はいずれも法名であり、武門の人と考えられ、「寿」「彼岸」の文字から、これを逆修塔(生前に死後の菩提を修するために建てた塔)とする見方もある。しかし、塔の記銘が善福寺の過去帳と一致すること、また同寺の過去帳では「浄因寿位」が「浄因禅門」とあること、さらに同形式の塔が墓石として建てられた例が他にもあることなどと併せ考えると、これらは武士の死後に建てられた墓石ないしは供養塔と考えられないこともない。</p> <p>この塔が誰の手によって建てられたか、正確なことはわからないが、室町初期には、この地に中沢郷地頭職の寄子として勢力をもった豪族がいたともいわれており、時代が少し下ると大久保氏とか大沼氏一族の活躍もある。いずれにしても、当時この地を支配した北朝系の豪族との関係を推定するのが自然であろう。</p> |



応永の宝篋印塔



宝篋印塔